

日向薬事始め (その4)<sup>1-3)</sup>  
—延岡藩侍医、白瀬道順と白瀬永年—

山本 郁男\* 宇佐見 則行\* 井本 真澄\* 岸 信行\*\*

Historical Studies on the Origins of Pharmaceutical Sciences  
in Hyuga (Miyazaki) (Part 4)<sup>1-3)</sup>

— Court physicians of the Nobeoka-Han,  
Dōjun Shirase and Einen Shirase —

Ikuko YAMAMOTO\* Noriyuki USAMI\* Masumi IMOTO\* Nobuyuki KISHI\*\*

**Abstract**

Dōjun Shirase (1756-1846) and Einen Shirase (1775-1799) took service as court physician of Nobeoka-Han under the Naito family in the Edo period. Dōjun Shirase was born in 1756 and learned medicine and Chinese medicine from Shoyo Kamei in Chikuzen (Fukuoka). After his return to Nobeoka, Dōjun Shirase became to be a teacher at Kogyokan's and Meidoukan's schools. In contrast, Einen Shirase, a grandchild of Dōjun Shirase was also born in Nobeoka and was a very smart child. When he was twenty-seven years, he was promoted as court physician by Masatsugu Naito. However, at the present time, there are no historical records and materials about Einen Shirase. Another famous thing Einen Shirase did was to write "Enryo-yo-kagami, 2 vol." in 1799. These books were on history of Nobeoka from 1587 to 1712.

The graves of both Dōjun and Einen Shirase are still located in Zenshouji temple in Nobeoka city.

This paper deals with Dōjun Shirase, Einen Shirase and the other court physicians around them in Nobeoka in the middle of the Edo period.

**Key words :** Dōjun Shirase, Einen Shirase, Nobeoka-Han, court physician, Edo period

**キーワード :** 白瀬道順、白瀬永年、延岡藩、藩侍医、江戸時代中期

2007.11.12受理

**はじめに**

前報において、著者らは延岡藩歴代藩主の中で有馬康純およびその子、有馬永純（清純ともいう。以下同じ）の教育係師範とともに侍医でもあった、延岡における医祖と呼ばれた渡邊正庵（1631-1699）をとりあげ、彼に連なる人々を中心

に延岡藩における医薬学の当時の状況を調査しまとめ報告した<sup>1)</sup>。

この歴史的調査の過程で延岡藩はわずか7万石足らずの小さな日向灘に面した山と海と川にはさまれた藩であるが、文化的にも経済的にも比較的高いレベルを維持しており、特に医薬における教育面において大きな遺産を残して

九州保健福祉大学薬学部 〒882-8508 宮崎県延岡市吉野町1714-1

School of Pharmaceutical Sciences, Kyushu University of Health and Welfare 1714-1  
Yoshino-machi, Nobeoka, Miyazaki 882-8508 JAPAN

\*九州保健福祉大学 QOL研究機構 〒882-8508 宮崎県延岡市吉野町1714-1

Quality of Life Research Institute in Kyushu University of Health and Welfare 1714-1  
Yoshino-machi, Nobeoka, Miyazaki 882-8508 JAPAN

\*\*北小路調剤薬局。〒882-0041 宮崎県延岡市北小路14-28

Kitakoji Dispensing Pharmacy, 14-28 Kitakoji, Nobeoka, Miyazaki 882-0041 JAPAN

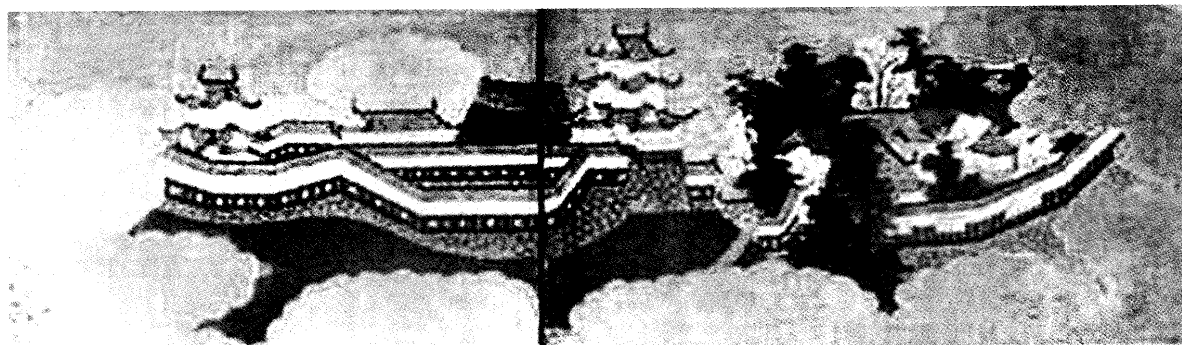


図-1 「延岡城下図屏風」から有馬康純公時代の縣(延岡)城<sup>4)</sup>

いることがわかった。そこで歴代藩主に仕えた侍医を中心に調べていくと内藤藩(1747-1871)の中にあつて内藤正陽、内藤政嗣、内藤政脩、内藤政韶および内藤政和らの侍医を務めた白瀬道順、白瀬永年と彼らを師とする一連の医薬師達の存在が史料としてあることが判明した。非常に少ない存在であるが、このシリーズにおいてぜひとも取り上げておく必要を痛感し、ここに報告する。

### 延岡藩歴代藩主の概略

天正15年(1587)豊臣秀吉が九州を統一し、当時豊前国香春岳(福岡県田川市)の城主であつた高橋元種が初代の城主として延岡に入城した。しかし、その時は延岡城ではなく県(あがた)城と呼ばれていた。

高橋氏は慶長6年(1601)、最終的に関ヶ原の戦いで東軍(徳川家康)方に味方し、本領を安堵されている。慶長8年(1603)、延岡城の築城に着手し、現在地に城下町の形態を作つていった(図-1)。

しかし、高橋元種は不幸にも罪人を隠匿した罪により改易され一代で終わっている。その後は肥前国日之江(長崎県南島原市北有馬町)より有馬直純<sup>なおよすみ</sup>が5万3千石で入封、以後有馬康純、有馬永純と3代続いた。

元禄3年(1690)、領民の逃亡事件が原因で永純は元禄5年(1692)越後国糸魚川(新潟県糸魚川市)に転封の憂き目にあつている。この有馬家に仕えた藩医が前報<sup>1)</sup>で述べた渡邊正庵であつた。

その有馬家の後に入封したのは日向の国における初の譜代大名、三浦明敏<sup>あきひろ</sup>であり、元禄5年(1692)、しもつけのくにみぶ(栃木県)からの2万3千石であつた。この三浦時代に縣藩から延岡藩と名称が変わっている。明敏は正徳2年(1712)、わずか21年1代で終わり、三河国刈谷(愛知県)に転封されている。従つてこの時代の文献は少なく、ましてや誰が侍医であつたかなど現在のところ不明である。その後を継いだのは譜代大名牧野

なりなか成央で正徳2年(1712)、三河国吉良(愛知県)から8万石で入封したとされるが、この時の支配は先の三浦氏の所領は有馬の失政の後で、延岡と白杵郡の一部のみで延岡藩として最も少なく、有馬氏が所領していた5万石の残りは幕府領となっている。牧野氏の支配領域は日向国のみならず、豊後国大分郡、国東郡、速見郡(いずれも大分県)にまたがっていたことから、その出費もかさみ、藩の財政は逼迫していた。さらに度々の藩政騒動も起こっている。牧野時代は(1712-1747)は成央、さだみち貞通と2代続いたが、貞通が京都所司代に栄転。延享4年(1747)、常陸国笠間(茨城県)へ転封となっている。この時の文献として「牧野家中延岡城下屋敷付絵図」(笠間稲荷神社蔵)<sup>4)</sup>も残っているので確実に侍医、藩医は存在したと考えられるが、現在のところ確証する史料はない。恐らく渡邊正庵の弟子達がいると考えられるが不明のままである。その後に継いだ同じく譜代大名内藤氏は明治まで続いた。内藤氏は延享4年(1747)、磐城<sup>いわき</sup>平(福島県)から内藤政樹<sup>まさき</sup>(初代)が7万石で入封した。

依然財政は苦しかったものの有扶持制、儉約金や専売制など様々な藩政改革が実行されている。8代と長く続いたこともあるが、歴代藩主が学問を尊び、学寮、武寮が建てられ、また江戸藩邸に学問所、崇徳館と、延岡の地には広業館と医学所、明道館を設立するなど学問、医薬の振興に力を注いだ。さらに、明治政府に藩籍奉還にあつて延岡城廃止後、ここに薬草園をおきたいとの願いを出していることは日向の地が薬草栽培に適しており、先の秋月橋門の働きによる「高千穂採薬記」の流れをくむところである。<sup>2)</sup>内藤藩は政樹<sup>まさき</sup>(初代)、政陽<sup>まさあき</sup>(2代)、政脩<sup>まさのぶ</sup>(3代)、政韶<sup>まさつぐ</sup>(4代)、政和<sup>まさもと</sup>(5代)、政順<sup>まさより</sup>(6代)、政義<sup>まさよし</sup>(7代)、そして政挙<sup>まさたか</sup>(8代)と、前述のように明治4年(1871)に廃藩置県をむかえるまで実に125年の長きにわたつて延岡に在城したことになる(図-2)。

本報でとりあげる白瀬家は政韶(4代)と政和(5代)につかえた侍医である。

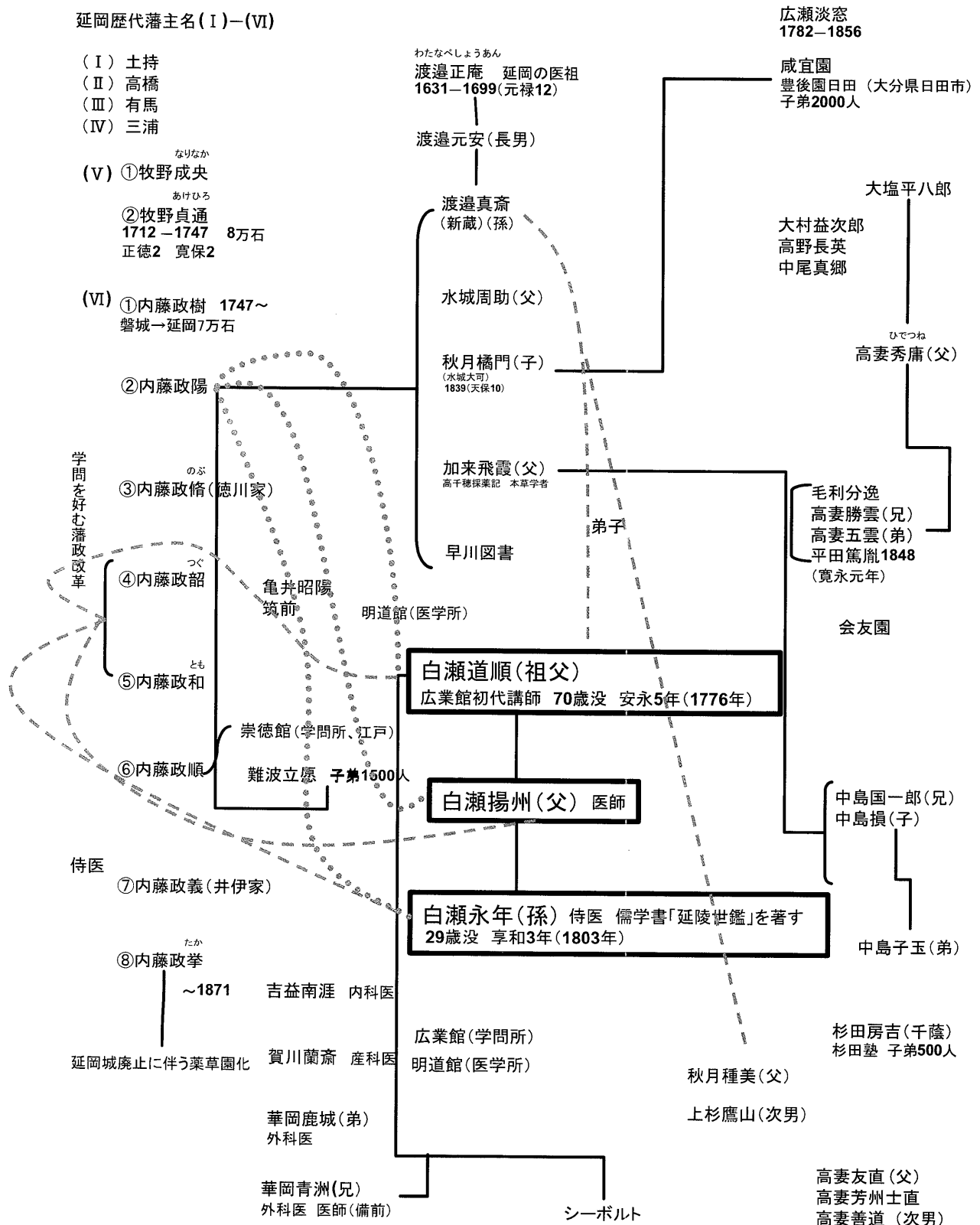


図-2 延岡藩と藩侍医

### 延岡藩藩医、侍医の概略

延岡藩の医業の始まりは先に述べた渡邊正庵であり、明暦元年（1655）－万治元年（1658）の間、私塾を開き、約100名にのぼる門弟を教育した。今日の医業教育の一機関といえる。その後正庵の長男、渡邊元安、渡邊新蔵はいずれも医師であり、渡邊家は侍医の家系であったと考えられる（図－3）。

藩学は藩直営ともいべき藩出身の若者の教育施設であり、一般教育課目である儒学をはじめ、数学、漢学および武道を教えた。中でも明和5年（1768）、内藤藩2代政陽が学問所（学寮）と武芸所（武寮）を城廓内本小路西端（現在の本小路町）に設立。嘉永3年（1850）、この学寮を「広業館」と称している。また、医業の教育の場として城下南町（現在の南町）に医学学問所、明道館があった。この経営は藩の侍医達、たとえば新妻文沖（1767－1864）とその養子、新妻金夫（1800－1864）や早川図書（1790－1859）があたっている。また緒方洪庵（1810－1863）、江戸末期の蘭学者、医者）が大阪で開いた、「適塾」に学んだ延岡の若者達、竹林恒夫、岩切孝哲男久吉、さらに京都の頼山陽（1780－1832）の門下生として学んだ甲斐士幹、新妻金夫、白石立教、牧文吉、片寄文蔵（延岡藩侍医）の名があるが、詳細は不明である。彼らが藩の侍医であったかどうかの資料はないが、しかし城下で何らかの形で医療に関係していた可能性は否定できない。今後このシリーズで取り上げてみたい。上記の明道館について記した新妻文沖（安政5年）らが南町の公地に建設した医学所の経営に私財を投じた人々の中に三井氏、永田氏、猪狩氏、寺尾氏、和田氏、児玉氏、河野氏とともに本報告の主人公である白瀬氏の名を発見することができることは1つ証左であろう<sup>11)</sup>。

ここで藩医について若干触れておこう。藩医とは江戸時代、藩に仕えた医者として定義されるがその範囲は広い。江戸時代、医者は朝廷医、幕府医、そして藩医、さらに民間医と大別された。医療の発展は「徒然草」に吉田兼好（鎌倉時代末期の随筆家、歌人（1282－1350））が著しているように「くすり」は当時、食、衣、住とともに重要であったらしい。すなわち、第122段には「文、武、医の道、誠に欠けてはあはれからず」さらに第123段には「無益のことをなして時を移すを、愚かなる人とも、第一に食ひ物、第二に着る物、第三に居る所なり、人間の大事、この三つに過ぎず。ただし人皆病あり、病に犯されぬれば、その愁、忍び難し、医療を忘るべからず、

薬を加えて4つの事、求め得ざるを貧しとす。」とある。時代はさかのぼるが薬の重要性がうかがえてあまりある。従って正倉院御物には種々の漢方薬が見出されるものの、奈良時代から鎌倉、安土桃山、江戸時代の国全体の国民医療は非常に粗末なものであったといえる。しかし、この時代は隋、唐、そしてイスパニア、ポルトガル（南蛮医学）、オランダ（和蘭医学）、そしてイギリス、アメリカからの西洋医学の輸入があつて徐々に変容していく。江戸時代の藩医は世襲制で、後継者は藩に儒医または古医方の勉強のため留学を願い出て帰藩後、時を経て藩医（侍医）となった。藩医は扶持が与えられ、生活も保障されていた。延岡藩の記録では一時15名ほどの侍医がいたこともあったらしい。藩医の後継者がいない場合は養子をむかえて許可を受け、藩医として認められたケースも多かった。国替の時は同行する藩医もいたらしい。江戸末期の日本の人口は約3,500万人であると推定されるが、当時の医師は約25,000人程度、そのうち20,000人は漢方医と推定される。西洋医は5,000人程度と算出されている。内藤家文書「延岡町かまど竈かず数人数高寺医師酒屋並牛寄帳」には医師の名があることからそれ相当の数であったと考えられる<sup>5)</sup>。竈数とは現在の所帯数（戸数）である。

### 藩医・侍医の系譜

図－2に延岡藩と藩侍医の系譜を示す。

#### 白瀬家 系図

一部記述したように、譜代大名であった内藤政樹は延享4年（1747）、陸奥国（福井県）より延岡に入封したのであるが、文武を奨励し、本草学、医学、儒学、兵学などの諸学の振興に努め、学問隆盛の気風は幕末まで続いている。白瀬家は系図（図－3、4）を見てもわかるように、元をたどれば渡邊正庵（延岡医学の医祖）までさかのぼる代々の侍医であった。

白瀬道順を祖父とし、その子白瀬揚州、そしてその孫が白瀬永年であり、第2人は白瀬炎郷と白瀬 騏である。この三男騏はのちに代々医家として名高い岩切芳哲（1730－1800）の養子となり、2代目を継いでいる。詳しくは後に記す。白瀬炎郷の孫、白瀬哲舟も同じく内藤藩の侍医を務めている<sup>6)</sup>。

一方、白瀬家は代々学問体系では京都の伊藤仁斎や荻生徂徠の流れを汲む復古学であり、安藤適斎、瀧口向陽に引き継がれている（図－3<sup>9)</sup>。

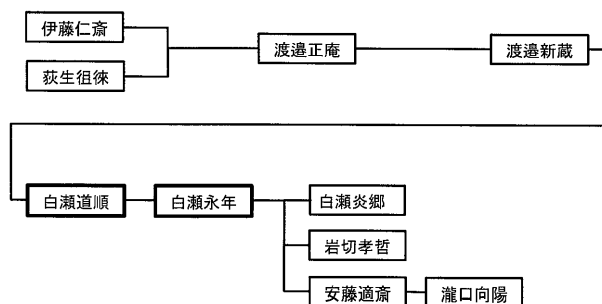


図-3 復古学の小史

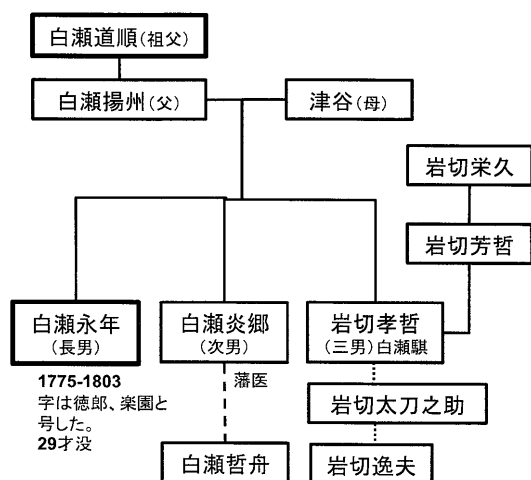


図-4 白瀬家 系図

## 1. 白瀬道順 (1756-1846)

宝暦6年(1756)、延岡に生まれる。筑前(福岡県)の亀井昭陽より医術を学び、帰国後、内藤政韶(4代)に仕えて侍医となる。広業館初代講師、明道館医学所にも関与、弘化3年(1846)90才で没する。墓は善正寺にある(図-5、6)。

## 2. 白瀬揚州



善正寺への道



善正寺正門

善正寺墓地全景  
(この地に江戸時代の有名な墓多数あり)墓地より善正寺および市街地を望む  
(煙突は旭化成工場)

白瀬道順を父とする。同じく医師であったが詳細は不明。今後の資料の出現を待ちたい。享年等不明。

## 3. 白瀬永年 (1775-1799)

名を永年、字を徳郎、号を楽園と称した。安永4年(1775)に生まれる。幼少より書を好むも武道は苦手だったらしい。

性格は温厚で家人は一度も永年が喜怒哀楽の情を表したことはなくいつも冷静であったと伝えている。上記の



表面

左側面

図-6 白瀬道順の墓

ように祖父を道順、父を揚州とする。母は津谷という。永年は享和2年(1802)弱冠27歳で侍医に抜擢され、侍医中の上席を占めていた。

永年はこれほどまでに脚光をあびた人生でありながら、どこで医術を学び、どのような医をほどこしていたかは史料もなく、詳らかでない。墓碑文には「先公孝猷廟寢疾尋損館舎侍医奉命待湯薬者若干人君居其一位次在君上者或不与焉」とあるも何ら業績に関する記述はない。ただ侍医という文字と薬という文字が見られることが本論文にとって救いである。それよりも永年は他の領域でその名を馳せた。永年は享和3年(1803)に没しているがいたく郷土史に興味を持っており、今日では延岡(日向)における貴重な文献の一つとなっている「延陵世鑑」上下二巻を著していることである<sup>10)</sup>。この著は寛政11年(1799)、永年が25歳の時にかかれたとされる。延陵とは延岡のことで内容は日向の国の由来に端を発し延岡地方の領主であった土持時代より高橋、有馬、三浦時代(三浦沓岐守の就封まで)について詳しく記述している。

永年の死後は実弟炎郷が嗣となり、白瀬家の世々代々医を以て継ぐ家系を守っている。仕えた藩主は主に内藤政韶(4代)であった。白瀬永年の墓は祖父道順と同じく善正寺(図-5、7)にある。



表面 裏面  
図-7 白瀬永年（楽園）の墓

#### 4. 岩切芳哲<sup>ほうてつ</sup>（1730-1800）<sup>7,8)</sup>

延岡における蘭方医の嚆矢者というべき人物。諱を正信。父は栄久。岩切家は代々医学を業とした。先祖は代々土持氏に仕えたが、土持氏が天正6年（1578）豊後の大友宗臨に破れたため、伊福形に陰棲して農業をしていたが、岩切新右衛門の代になって3人の男子が生まれた。この末子が芳哲である。兄二人は農業を業とするも、芳哲は幼少より聡明かつ俊敏で「人間として生まれたからには草木のように朽ちるのは潔しとせず」といい、発憤して読書に努め、十八才の時、長崎に行き、長崎の西洋医家、榎橋栄哲について数年間オランダ医術を学んだ。この長崎の榎橋栄哲は同じく長崎にて有名なオランダ医榎橋鎮山<sup>ちんざん</sup>の孫にあたる。この鎮山はオランダ人に直接オランダ語を学び、若くして通訳ができる実力をもっていたという。鎮山はさらに外科医術についてはフランス国のアムプロア・パレー著「外科諸技術書」を和訳している。

岩切芳哲は宝暦2年（1752）頃、長崎より帰延、25歳頃から藩主である内藤政樹、政陽、政脩、政韶の4代に仕えたことになる。特に政樹の病気を診て治したことはつとに有名であり、このことにより名医の名をほしいままにした。

岩切芳哲は寛政12年9月4日（1800）71歳で病没。その墓地は延岡市伊形町一ヶ岡にあり、墓碑文は白瀬永年の撰になり、その由縁が興味深い。芳哲には子がないため、白瀬永年の弟 駿が後を継いでいる（図-4）。

#### 5. 岩切孝哲<sup>こうてつ</sup>（白瀬永年の弟、駿）（1781-1863）<sup>7,8)</sup>

岩切芳哲の弟子で、白瀬家より駿が入籍。医家として存続した。孝哲は28歳で長崎に遊学、3代目榎林栄哲に西洋医学を学び、帰延。診療に従事し、門弟を養い、名声を得ている。文久3年（1832）、83歳で没す。その墓地は芳哲と同じ伊形町一ヶ岡にある（図-8）。



図-8 岩切孝哲（白瀬 駿）

#### まとめ

延岡藩侍医とされる白瀬道順とその子孫の延岡における活動について記述した。彼らは代々江戸中期に延岡に福島県磐城より入封した内藤政樹、政陽、政脩、政韶、<sup>まさき まさあき まさのぶ まさつぐ</sup>政和、政順、政義、政挙の8代の藩主のうち、4代政韶、5代政和に仕えた藩侍医であった。代々医をもって学問の道で知られた家系である。特に白瀬永年は延岡の歴史書として国内でも知られている「延陵世鑑」<sup>えんりょうよかみ</sup>全二巻を著したことで藩・侍医としてよりも歴史家として名が知られている。

白瀬家の墓は現在延岡市善正寺（上野坊墓地）にある。

#### 参考文献

- 1) 山本郁男, 宇佐見則行, 井本真澄, 岸信行: 日向薬事始め（その3）—延岡の医祖、渡邊正庵とその周辺—。九州保健福祉大学研究紀要 8:187-192, 2007.
- 2) 山本郁男, 岩井勝正, 井本真澄, 宇佐見則行: 日向薬事始め（その1）—秋月橋門とその業績—。九州保健福祉大学研究紀要 6:277-285, 2005.
- 3) 岩井勝正, 井本真澄, 宇佐見則行, 山本郁男: 日向薬事始め（その2）—賀来飛霞と延岡藩での採葉—。日本薬学会第125年会, 東京, 要旨集4 pp.219, 2005.
- 4) 延岡市教育委員会文化課: 築城400年記念『甦る延岡城』。延岡, 2003.
- 5) 甲斐典明: 「有馬時代とまちづくり」から。延岡400年の歴史とまちづくり 33, 夕刊デイリー新聞, 5面, 夕刊デイリー新聞社, 延岡, 2002.8.22.
- 6) 黒木, 阿万, 城山口（宮崎日日新聞社）: 「宮崎の百人」。藤屋印刷, 宮崎, 1983.
- 7) 松田仙峽: 延岡先賢伝。藤屋印刷所, 宮崎, pp.19-22, 1956.

- 8) 松田仙峽：延岡教学三百年史. 延岡教学三百年史刊行会, 延岡, 1955.
- 9) 佐村八郎：国書解題. 六合館, 東京, 1931.
- 10) 石川恒太郎：延陵世鑑（附 延陵旧記）延岡市立図書

館蔵

- 11) 石川恒太郎：延岡藩の教育：宮崎県地方史研究紀要第3輯. 宮崎県立図書館, 宮崎, pp. 1-8, 1977.